

処理	学 長	副学長	副学長	学部長	学部長	事務局長	学科長

受付

学 長 殿

2020年 5月28日

2019年度 教育改善事業に係る取組の実績報告書

標記の件について、採択された取組の実績を以下のとおり報告します。

○教育改善事業の対象となった取組（公募要領）

学科、委員会等：FD・SD委員会

該当番号 対象の取組

①	FD、SDの充実
---	----------

申請（代表）者： 引馬知子 印

1. 取組の名称

FD・SD活動支援プロジェクト

2. 取組の実施単位（「個人」、「組織」のいずれかを丸で囲み、「組織」単位の場合は組織の名称を記入してください。）

個人	<input checked="" type="radio"/> 組織	FD・SD委員会
----	-------------------------------------	----------

3. 取組実績の概要（実施スケジュールを含む）

本プロジェクトは、本学のFD・SDにおける初の試みとして、学科単位、学部・学科を越えたグループ、教職員によるグループなどによる、能動的で協働的かつアウトプット型の小規模な取り組みを可能とする目的で実施された。2名以上の専任の教職員（複数の教職員、複数の教員、複数の職員で構成）が、FD・SD活動に関わり本学に寄与すると想定できるテーマと効果的な実施形態（ワークショップ、小規模研修会等）を自由に設定し、FD・SD委員会がその実施を支援し、その成果を本学に還元することが目指された。

内容としては、1. 学内教職員による自主的な研修会・研究会、2. 講師を招いた研修会・研究会、3. 研修への参加及び学外における交流、を主に対象とした。

FD・SD委員会として、学内の教職員からの申請受付、プロジェクトの採択、経費執行、報告を受け付ける枠組みを作成し、手順に基づきプロジェクト支援を学内の関係機関と協力して行った。結果として6件の具体的プロジェクトが採択された。各プロジェクトは申請者の責任において実施し、FD・SD委員会は要請に応じて支援を行う位置づけにあった。実際の取り組みにおいては、委員会は時に実施者と連携し、学内を対象とする研修会についてともに周知するなどの対応を行った。年度末である2020年3月末に向けて、採択時から求めていた実施報告の提出を研修代表者（プロジェクト採択者）に依頼した。また、本プロジェクトは、2019年度終盤のFD・SD委員会において次年度も継続が望ましいという合意になり、次年度に向けた教育改善事業氏申請につながった。

4. 取組の成果

本学ではこれまで用意されたテーマのもとで一定の内容を聴講し、講師と聴講者の質疑応答の機会を設けたうえで、聴講者である個々の教職員がその知見を理解し、FD・SDの推進を図るというインプット型の取り組みは行われてきたが、これに加えて、本プロジェクトの成果として、新たに学科単位、学部・学科を越えたグループ、教職員によるグループなどに、能動的で協働的かつアウトプット型の規模の異なるFD・SDの取り組みが実際に行われたことがあげられる。複数の教職員による、自由な発想に基づくFD・SD活動における双方向的な積み上げは、本学の新たなFD・SDの推進に寄与すると考えられる。

具体的には、①「保育・教育・施設」との連携強化及び実習教育の在り方に関する研修として、実習先を訪問し、実習教育における養成校と実習先との連携方法について意見を交換を行い、新たな知見を得たり関係性を醸成することができた、②高等教育における国際化対応に向けた取り組みの在り方に関わり、他大学等における言語的ハンディキャップを減らすプログラミング教育の実践等が明らかになった、③本学の新任教員を対象に、本学への理解を深め、業務をさらに充実するための新任教職員研修会を開催し、本学の過去・現在・未来を切り口として、小グループで多岐にわたる意見交換ができ、また業務や授業・研究、学生対応の困難さなどの課題のみならず、本学の強みや未来像を共有し、建設的な議論が行えた、などがあった。

5. 課題・問題点

6件のプロジェクトが採択されたが、科学研究費に関わる企画である講師招聘やSD活動を深める小規模活動を目指した企画など、予定していた2件のプロジェクトが、新型コロナウイルスの情勢のために、年度内に実施できなくなり、委員会および学内で調整のうえで延期となった。また、1件については、教職課程に関する実態把握や教職課程の質向上、教職糧に関する図書や資料の購入を目指していたが、年度内にプロジェクトの実施ができきらずに終わった。これは、日程調整し研修機会を設ける予定だったが、学内の対象者が集まる日程調整、他の諸所の委員会や会議日程および業務で無理であったためと報告されている。本プロジェクトの実施は各プロジェクトによる能動的で自主的なものとして設定されており、一定の成果が見出せるものの、社会情勢や学内状況、業務状況によっても左右され、実施を希望しているができきらないという現状があったことも明らかとなった。また、FD・SD委員会が各プロジェクトの実施について年度末の報告を受理するにあたって、5月最終週まで報告書がそろわないなど、全体的を通じた実施にあたって、困難な点が散見された。

6. 自己評価

学内で新たなFD・SD活動を行えばとの声があり、また過去のFD・SD委員会から引き継がれる計画等に、学科単位等でのFD活動などを行っていければ望ましいとの明記が見受けられていた。それらを受け調整しながら、FD・SD委員会として学科単位、学部・学科を越えたグループ、教職員によるグループなどによる、能動的で協働的かつアウトプット型の小規模な取り組みの実施を目標として、枠組みをつくり、支援したことには一定の意味があったと考えられる。またこの枠組みのなかで、委員会としても一プロジェクトとして新任研修会を行うことができた。

しかしながら、実際の各取り組みにおいては、当初の本プロジェクト全体の経費とこれをもとにした各プロジェクトへの配分費に比べて、実際に執行された内容および経費はだいぶ縮小されたものとなった。これには新型コロナの状況も大きく関わっているが、そうではない部分も見受けられる。

教育改善事業支援費におけるFD・SD支援のカテゴリーは、FD・SD委員会が申請し枠組みを提供しなくとも、各教職員が活用できるものであり、委員会が申請してさらに実施者を募る2重の手続きが今後も必要か検討が要される。

7. 今後の予定（取組成果の活用方法や取組実績の分析・検証、課題・問題点の対策等）

2019年度後半のFD・SD委員会の決定に基づき、同プロジェクトについて一定の意義があるのではないかとということで、2020年度に向けて、2019年度3月末に教育改善事業申請の準備を行い、4月に申請することとなった。同時並行で、2019年度に行われた各プロジェクトの報告書を受け付けていった。委員会として依頼をお願いし続けたものの、各プロジェクトの報告書がそろったのは5月最終週であった。それらを受けて分析した結果のひとつとして、当初の予定されていた各プロジェクトの実施内容ができきらないものが一定程度あったこともあげられる。

2021年度に向けて、こうした点などを検討し、さらに2020年度の状況も踏まえて、本プロジェクトをFD・SD委員会として実施することが妥当であるのか、あるいは、委員会としては、違う形でFD・SD活動を支援していくのかを検討していく必要があると考えられる。

処理	学 長	副学長	副学長	学部長	学部長	事務局長	学科長

受付

学 長 殿

2020年 5月 28日

2019年度 教育改善事業に係る取組の実績報告書

標記の件について、採択された取組の実績を以下のとおり報告します。

○教育改善事業の対象となった取組（公募要領）

学科、委員会等：国際交流委員会

該当番号 対象の取組

14	海外の大学との大学間交流
----	--------------

申請（代表）者：藤森智子

印

1. 取組の名称

海外短期研修（台湾）のパイロット・ツアー

2. 取組の実施単位（「個人」、「組織」のいずれかを丸で囲み、「組織」単位の場合は組織の名称を記入してください。）

個人	<u>組織</u>	国際交流委員会
----	-----------	---------

3. 取組実績の概要（実施スケジュールを含む）

本パイロット・ツアーは全学部全学科の学生が参加できるプログラムとして4泊5日の行程で予定された。台風の接近に伴う飛行機の遅延のため出発日が一日遅れ、実際には2019年8月10日(土)から13日(火)までの3泊4日の日程で、教職員2名(教員1名, 事務員1名)の引率と10名の参加学生で実施された。提携校であるHKUとの関係を利用しながら、保育、福祉施設の見学や学生交流を主軸としつつ、日本文化を含む現代の多文化を包摂した台湾社会を見学・体験した。3日間の研修の1泊は台中泊とし、HKUの学生との交流、学内の幼稚園を含む施設見学、台中市内見学を行い、後半2泊は台北泊とし、絵本館体験、台湾スイーツ工場見学、芝山岩史跡見学、中国茶体験、龍山寺史跡見学等を行った。多文化・異文化を体験しながら、福祉、保育といった本学の専攻に関わる施設等を見学し、多文化共生と専門性への考察を深めた。

4. 取組の成果

まずは、参加学生の満足度を上げるが、台風により一日少ない3泊4日の日程で実施されたツアーであったが、参加学生たちの直後に実施したアンケート、反省会及び報告書からは本プログラムが高く評価されたことが明らかであった。どの訪問先に関しても学生たちからは肯定的な評価が寄せられた。学生交流、歴史学習、文化体験、そして学部学年を超えた横断的な参加学生間の交流が高く評価された要因であった。次に、協定校との関係が深まったことが挙げられる。HKUの訪問時間も台中の滞在期間も台風の影響で短縮されたが、先方の教員の好意と国際長の手配により学内見学、学生交流といった有意義な時間を過ごすことができた。先方の教職員と交流を持つ時間も与えられ、両校の今後の関係において、初の学生引率訪問は成功したといえる。また、パイロットとしての実施であったが、今後持続可能なプログラムであることが確認できた。炎天下の移動手段など、細かい修正すべき事項はあるが、プログラム全体としては、今後も実施できるものである。全体として、パイロット・ツアーの取組はおおいに肯定されるべき内容であったといえよう。

5. 課題・問題点

無事に実施された点において、大きな課題や問題点はないといえよう。今後は、引率者が誰かによらず実施可能なプログラムとして定着を図ることが課題である。HKUとの連携を含め、国際交流委員会が中心となって持続可能なプログラムを検討していくことが求められる。

6. 自己評価

本パイロット・ツアーは国際交流委員会が主催した初の全学対象の海外研修プログラムであった。企画から募集、実施までを国際交流委員が一丸となって行った。また、引率も教員・職員の2名体制という、これまでの教員のみでの引率の研修とは違った形態で実施し、成果を得た。多くの初めての試験的な試みを実施し、学生、学内、HKUから肯定的な評価を得た。今後も持続的なプログラムとして行えるよう検討を重ねたい。

7. 今後の予定（取組成果の活用方法や取組実績の分析・検証、課題・問題点の対策等）

次年度も同プログラムの申請を行ったが、コロナウイルスの世界的拡大に伴い、海外研修は延期された。国際交流委員会では感染拡大が治まった時点で再び研修実施を検討すると同時に、オンラインを通じた新たな国際交流も検討している。